

中学部三年A組

世界は

関根 大河

この後に来る言葉を僕は書くことができない。
なぜなら、これは時によって自分にとっての世界というものが変わっ
てしまうからだ。

悲しいときは世界は酷い。

嬉しいときは世界は美しい。

それでは世界は何かを言い切ることはできない。

自分は何かと聞かれたら僕は答えられる。

自分の全てを知っているからだ。

だが、僕は世界を全く知らない。

だから今日も新しい世界の見方があった。

そして明日も知るだろう。

僕が世界の全てを知った時、なんと言うのだろうか。

世界はさびしさに満ちていると

酒巻 拓

寂しいものの話をしよう。

いつからだろう、プライドを守るために

自分の感情を出さなくなったのは。

寂しいという感情を、誰かに相談することが恥ずかしいと感じるよう

になったのは。

そうして私たちの心は蝕まれていった。

寂しい時には寂しいと言おう。

祖父母がいなくなると寂しいと。

好きな芸人が、アイドルが、やめると寂しいと。

誰かに嫌われると寂しいと。

最愛の人と別れると寂しいと。

親が老いていくことがわかると寂しいと。

一体、成功体験や実績、現実で起こったものだけが人の心を作るのか？
感情の起伏こそ、わたしたちを作っていくのだ。

寂しい時には寂しいと言おう。

独りぼっちだと寂しいと。

寂しいと感じたことを、一つずつ、吐いていく。

それでも人々は孤独に、寂しさを抱えていくのだから

世界は寂しさに満ちていると。

名前に込められた思い

丸山 桃佳

今回私は自分の名前の「桃佳」について調べることにしました。

「桃」という漢字はそのままですが、果物の「もも」を示します。ほかの意味も気になったので、桃の節句に桃を飾る理由も含めて、「桃」に込められた意味を調べました。すると、『桃の木は、中国では古来より不老長寿をつかさどり、厄災や病魔をよせつけない邪気払いの力をもつ木として重宝されている。また、桃という漢字は「木と兆」で構成されていることから、多産や子孫繁栄をつかさどる植物だといわれている』、とでてきました。桃の節句は、このように桃が魔除けや厄除けの力をもつ縁起の良い植物であることから、子どもに降りかかる災いを退け、健康で幸せに育つようにという思いが込められているものだそうです。

つぎに「佳」についてです。「佳」とは『すぐれてよい、めでたい、美

しい』、とでてきました。さらに、成り立ちについても調べていると、「圭」は縦横の線を規則的に重ねた字であることから、「整つている様子」を表し、これに「人」を組み合わせて、「心身ともに均等が取れている人・整つている人・美しい人」を意味するようになったようです。また、漢字辞典には、土を盛り上げてきちんと三角形にしたことを表し、「きちんとすつきりしている」という意味と出てきました。

また、両親に私の名前の由来を聞いたところ、「桃のようにかわいほつぺで、『桃』という言葉はとてもしい意味を持つから」。また、私が生まれる直前になくなつてしまつたおばあちゃんの「佳子」のとても良い意味の「佳」を使ったかつたから」と言っていました。

私はこれまで桃という字は果実の桃だけを示すものだと思つていましたが、ほかにもいろいろな意味があるのだなと知りました。また、「佳」という字にもとても素敵な意味があるのだなと知りました。また、漢字は、へんとつくりによつて意味をなしていることもあるということがとても興味深かつたです。

これから、このとても素敵な名前に見合つた人になれるように意識しようと思ひました。

内容にあつた言葉遣いについて

佐藤 和信

僕は、二つの記事を読んで記事の内容によつて言葉遣いが違うことに気づきました。一番大切な内容の違いによつて生まれた言葉遣いの違いの例について書いていきます。

一つ目は、記者の立場をどのように表現しているかです。例えば、記事Aはコロナ禍によつて観光客が減少している経済的な問題について主に書かれています。それに対して、記事Bは観光客の増加による外来種の侵入状況が悪化している自然保護の問題について書かれています。その結果、記事Aは環境と保全を両立させる方法を優先することを強調する言葉遣いで書かれていることに対して、記事Bは自然の環境を保護する

ことがもつと大切であることを示す言葉遣いで書かれていることが分かります。

二つ目は、どのような情報を伝えているかです。具体的に言うと、記事Aは二一年に死んでいるのが見つかつたアマミノクロウサギは計百七十四匹で過去最多であるという情報に対して、記事Bは奄美大島と徳之島でのアマミノクロウサギの交通事故死が昨年だけで七十三件となつている情報を伝えていることが分かります。それらによつて、記事Aは全体的な問題を強調した書き方であるが、記事Bは観光客の増加による交通事故死だけを強調した書き方であることが明らかです。

これらの例から、二つの記事の主な内容の違いによつて言葉遣いに違いが生まれることが分かりました。これらの記事を読み比べて、記事の主な内容に注目しながら読むことがもつと正確に記事の情報を理解するために欠かせないものだと思います。

ちるさくら

藤田 理紗子

「ちるさくら海あをければ海へちる」

と、高屋窓秋は詠んだ。この句からは、壮大な自然に繰り広げられている風景が思い浮かべられる。それは、崖に立つ太い桜の木が、淡い桃色の桜の花びらを少しずつ下へと落としているところだ。その淡い桃色の花びらは、崖の下の、鮮やかに青い海の水面にとどまる。これはきつと、四月のある日に起こつた風景であろう。さらに、夕焼けの真つ最中に起きていると考えられる。

高屋窓秋は、この様々な色の中で起こる自然の重なり合いに心を打たれて、この句を書いたのだと思う。それに、この句には象徴的な意味もあると私は感じた。それは、美しいものは永遠にその美しさを保つことはできず、いずれ滅びてしまうが、その滅びたものは、きつと、違う美しいものになつたり、異なる種類の綺麗なものと重なり合えるだろう、という意味だ。

この俳句で、私には気になった表現があった。それは「海」と「ちる」、それぞれの繰り返しだ。「海」の繰り返しは、波を想起させ、その水面の壮大で美しい世界を感じさせる。その未知の世界は、美しさの中に怖さを秘めているようだ。「ちる」の繰り返しは、物事はすべて、いずれ滅びるとする作者の心情をうまく強調できているものであると考える。

あれ、全然違うじゃん

大西 萌々香

皆さんは、第一印象とはどんなものだと思うだろうか。私は、「性格は顔に出る」という言葉そのままだと思っていた。でもその印象を変えた人がいた。そう、それは自分だったのだ。

私は年長の年から小三までを韓国で過ごし、中二から今までをヒューストンで暮らしている。新しい地域に引越すときには、誰もが緊張するだろう。私はかなりの人見知りで、何もしゃべれなくなる人間だ。幼稚園のころから人見知りがひどかったと母から聞いていたが、幼少期のことはそれほど詳しく覚えていないので、人からどう思われていたかはほとんどわからなかったし、それほど気にしたことはなかった。だがヒューストンに引越してきたのは十三歳という、人からどう思われているか気になるお年頃なので、同じ現地校に通っているAちゃんに、「私の第一印象ってどうだった？」と、仲良くなった後に聞いたら、

「めっちゃ静かで、置物みたいでまじめかと思った」

と言われた。その時はそのように思われていると思っていなかったのですが、とてもびつくりした。私は、出会って最初のころは人見知りと緊張がすごい状態なので、まじめや大人しそうとみられることがよくあることなのだということを初めて理解した。私の性格はうるさい感じなので、仲良くなってそれに気づいた友達は、

「今は全くもう想像できない」

と言っていた。この事から、性格は顔にはでないということがわかった。

それから私は、性格は顔に出ないことのメリットを考えてみた。私は

大きなトラブルや問題に巻き込まれることがあまりないということだと考えた。私のように見た目はおとなしそうだ、中身は明るくうるさいタイプの人は、まず最初に犯人と疑われることはほとんどないだろう。そういう意味で大きく巻き込まれることはないだろうと考えた。

次にデメリットを考えたら、もしも将来アルバイトや会社の面接の時に、緊張して何もしゃべられなかったり、人見知りがすごくて会話もまともにできないと判断されたら落とされてしまうだろう。これは私も実際に面接で経験したことだ。練習の時はもちろん緊張してないので文をすらすらと読めるのだが、緊張してしまうと言葉を飛ばして読んでしまったところだ。これは本当に悩みであるので、誰か対処法を教えてください。

作られた「物語」の真実を突きつけるには、長い時間をかけて観察することが大事であり、それは私の経験からも言えることだ。この経験から、長い時間を通して隠された一面や意外な真実を広めていくのも大切であると私は考えた。

忘れないで

田口 琴音

物心ついたときから、母の母、祖母は介護施設に入っていた。認知症だった。たくさん物や事を忘れてしまう病气だ。施設に入っている祖母に会えないこともなかったが、父方の祖父母に会いに行くことが多かったり、コロナが流行ったり、祖母の体調が良くなかったりと、いろいろな都合で行く機会が少なかった。

母から聞いた話によると、祖母は私をとてかわいがってくれたらしい。うつすらとしか覚えていないが、ひとつだけ、鮮明に覚えている事がある。

それは、祖母の介護施設の部屋で、シュークリームを食べたことだ。そのシュークリームの味が甘くて全部食べきれずに父か母に残りをあげた気がする。その頃は、祖母の認知症もそこまでひどくなくて、私や私の両

親、祖父、叔父、叔母のことは覚えていたと思う。

しかしながら、認知症なので、話したことはすぐに忘れてしまう。祖母が祖父に「ランドセルは買ったんかい？」と聞いて、「買ったんだってよ。」と答える。そして違う話をしてるとまた、「ことちゃんランドセル買ったんかい？」と聞く。

これを何回も何十回も続けるのだ。忘れてしまうから。今話していたことでさえ、忘れてしまうから。何回も聞いてくる。次第に、私たちのことも忘れ始めた。悲しかった。そんなに思い出があるわけでもないが、やっぱり血のつながっている家族で、昔かわいがってくれた祖母に忘れられると悲しい気持ちになる。

私がアメリカに来る前、最後にと、祖母の施設に行った。当時はコロナ禍真っ只中で、直接の面会は厳しいから、ガラス越しに電話での面会だった。そこにいたのは、私を知っている祖母ではなかった。電話越しでは、「誰だ。あつちいけ。」と言われたと思う。ショックだったせいかわ、ちゃんと覚えていない。人は、病にかかるだけで、こんなにも変わってしまうのかと、痛感した。

祖母はこの間、この世を去った。日本でお葬式を行ったため、私たちはオンラインで参加した。画面で見た祖母の顔は、少し悲しそうだった気がする。

一か月前の考査を振り返り（うる覚え）

藤原 真由

先延ばしは良くないことだ。先延ばしは、英語でプロcrastネイションという。プロcrastネイションはみんなの心の中に静かに宿っている悪魔だ。でも、さすがに一か月も作文を書くのを先延ばしにしてはいけないと思い、補習校前日の今、急いで書いている。今週は、この前の週にやらないといけないことを先延ばしにしたせいで、絶望的だった。もう、やることを最小限に縮小して、なんとかラポレポートとエッセイ二つずつと、テストを五つやりとげた。しかし、忙しかったからと言

訳しても、作文は自分で勝手に書いてくれないので、今こうして書いている。では作文のお題の下に書いてある質問に答えよう。

事前の勉強についてだ。私はやらないといけないことリストをワードに保存している。そして一日のうちに何度も更新し、整理している。だが、やらないといけないことがポンポン湧き出てくるため、残念ながら今、リストは五十二ページ分になってしまっている。それどころか、「今日やらないといけない」ことリストに約百項目ぐらいいあるため、そもそも何をやらないといけないのかわからない状態である。整理能力が全く無いことがわかるだろう。そのような悲惨な状況のため、「考査勉強」は常に「今日やらないといけない」リストに入っていたのだが、毎日ダラダラと先延ばしにしたため、結局やらすじまいだった。

では、今までの考査と比べて、自分が工夫したところ、またはできなかったところは何か。これに答えるためには、今までの考査を思い出す必要があるのだが、まるで今日以前の記憶が全て吹っ飛んでしまったかのように思い出せない。現地で高校二年生になってから去年より難易度が明らかに上がった。宿題の量はあまり変わらないが一つ一つの問題にかかる時間がほぼ二倍になったため、自由時間がかなり減ってしまった。そのため、一つ工夫したことと言えば、現地で積み重ねて来た知識を使って考査を感覚でやり押ししたことだ。理科は化学を去年選択したのですでに習っていたし、数学も現地で三年ぐらいい前やった内容が出たし、社会も六年生ぐらいいにやった気がする。そして、国語も今まで習ってきた英語のエッセイの書き方を応用してなんとか乗り切れたと思う。できなかったことは、やはり勉強時間の確保だったと思う。

次にテストの形式や内容についてだ。国語のテストの大半が文章を書く問題でとてもありがたかった。文章なら部分点がもらえるからだ。しかもコンピューターでの考査だったと思うから、鉛筆を片手に持つて必死に書くテスト形式より圧倒的に多くの文字を書けたと思う。しかし、文章を書いていく時に、以前みたいに書く力が減少しているのに気づいてしまい、ショックだった。理科は相変わらず問題と答えの選択肢にボケを入れていた。社会は基本的な知識しか問われないが、そのおかげで現地校の世界史の授業で役に立っている。そして、最後に数学は、テスト中に何度も計算機をとろうと手が反射的に動いてしまっていた。数学の

テストのおかげで、計算機依存を実感させられた。

そして、最後に次の考査に生かしたいことは何か。それは、現地校関係のもので時間が無いことがわかったから、授業一回だけで全て覚え理解する覚悟で挑むことだ。今回はたまたま現地校ですでに習ったことが考査に出てきたから何とかギリ押しできたが、次の考査の理科と社会はまだ学校で習っていないということがすでにわかっているため、補習校の授業に集中しようと思う。ここまで来て、どんどん作文の内容が薄くなってきているのに気づいただろうか。集中力が寿命を迎えているのだ。集中力がなくなってくると、つい先延ばし癖に走りがちだ。私はそれを大いに知っている。しかし、心の中のやつがささやいてくるのだ。休憩に少しだけテトリスをしろう。

それでは、またプロクラスティネーションを繰り返します。

小さな学校と百円のコロッケ

大矢 かなで

今年の夏、日本に一時帰国した私は、京都にある元中学校を訪れた。仲が良かった友達と部活仲間、先生に会うためだ。アメリカに来て文化や言語の壁に阻まれ、日本の生活をとて恋しく思った日々も多かったのだ、よく夢に出てくるのは日本の中学校に通っている自分だった。念願の帰郷で久々に感じる懐かしい雰囲気思わず心が和んだことをよく覚えていたが、それ以上に疑問が多かった。こんなところだっけ、と。

第一に感じたのはサイズの小ささだ。現地校が大きすぎるせい、日本の学校も私の記憶の中で一・五倍程拡大されていたらしい。教室間の移動に最悪五分かかる現地校と一分もない日本。純粹に便利だ。

さらに、人の少なさが目をひいた。単純に私の現地校に人が多すぎるといえるもあるが、バックパックの後ろからグイグイ押されるようなことも、足が密集しすぎて地面が見えなくなることも無い。身長が驚くほど高い人もそこまでいないので空も見やすかった。

最後に感じたのは、時間の変化だ。知らないうちに髪が長かった子は

髪を短く切っていたし、先生はとてもスリムになっていた。サイゼリヤでご飯を食べることになっていったのだが、ほぼ全員が塾に通っており塾が始まるタイミングで急いで店を出ていった。

相手からしてみれば私のほうがよほど変わったのかもしれない。事実、「大矢、ちよっと太った 笑？」

と言われた。回答はYESなのだが。それはそうとして、少し悲しい気持ちになった。自分だけ置いて行かれていような気がしたのだ。それに、学校が想像と違ったこと。皆で仲良く部活してコンビニで買い食いしながら帰った夕方には、今年はまだ皆それぞれの塾に行っているのだ。畑だった場所は埋め立てられ、新しいマンションが建っていた。自分の知らないところで物事が勝手に進んでいくのは切ない。自分が想像していた場所はただの理想で現実とは違っていた。ショックだった。

アメリカに帰る前、コンビニでコロッケを買った。百円のコロッケだ。袋を開けると、香ばしい匂いがフワツと広がる。

部活帰りによく買っていたホットスナック。その味だけは在りし日と同じようにとても美味しかった。

いろんな命が平等に扱われる世界

中島 優音花

私達はたくさんの生き物と共存している。そんな中で、私は生き物の間に扱いの差を感じている。

例えば、雑草と花。どちらも生きた植物だが、どうして雑草は抜いて、どうして綺麗に咲いている花は手折ってはいけないのか。どうしてゴキブリは殺してもいいのに、カブトムシやクワガタは殺さないのか。

正直にいうと私も、もし家にカブトムシやクワガタなどの昆虫が入ってきたら、殺すのは流石に可哀想だと思う。しかし、ゴキブリが入ってきたと知ったら躊躇いなく倒してしまう。そんな時わたしは無意識に自分が差別をしてしまっているのだと気づく。

人間の間での差別は絶対してはいけませんが、他の生き物の間の差別をするなどという話は聞いたことがない。これは人間が勝手に、この生き物は悪だと人間の都合で考えてしまっているからではないだろうか。

例えば、ニュースで時々人間が大型の動物に襲われたという事件を聞く。人間が山で傷を負っていたなどと、人間は被害を受けた側で全く悪くない風と言う。しかし、人間も勝手に山に入ったり、森林を伐採したりと、動物たちの生きる場所を減らしている。人間にも悪いところがあるが、どちらも自分が生きるためにしていることだ。

一概に一方が悪いとは言いつれない。私にも明確な解決策は分からないが、いろんな命が平等に扱われる世界になればいいと思う。

平和

桑畑 真樹人

平和は、戦いや争いがなくおだやかな状態を説明する時に使う言葉です。ほとんどの人間は平和をずっと求めてこの世界を作りました。しかし、その完璧なユートピアのような世界を続けるための様々な平和の哲学の正反対のことをたくさん合っています。今でも地球の様々な所では暴力や殺し合いが続いています。

平和とは、日常生活でストレスが少なく、心に余裕がある時や、過去の経験やトラウマにとらわれず、自分自身を受け入れ、前向きに生きられる状態です。

でも平和はそれだけではありません。例えば、平和な世界はもつとスケールの小さいことでもあります。家族、友人、職場の同僚などの人間関係の人々と尊重し合い、協力し合える関係の中でさえ、平和な時や争いの時もあります。それ以外にも、自分の精神衛生のことも平和や争いの時もあります。

スケールを少し上げてみて社会レベルになると、少し変わります。犯罪が少なく、人々が安心して暮らせる社会、文化、宗教、性別など、様々な違いを持つ人々が互いを認め合い、共に生活できる社会、差別や偏見

がなく、誰もがその人らしくいられる状態です。

スケールをまた上げてみて国家レベルになると、最後にまた変わります。国民が政治に参加でき、言論の自由、表現の自由など、基本的な人権が守られている国家です。誰もが基本的な生活を送ることができ、教育や医療などの機会が公平に与えられている状態です。自国のために軍事力を持たない、他国との争いに介入しない政策です。

りんご戦争

藤崎 百花

平和とはなんだろう？今日も朝から、弟と消しゴムごときで喧嘩したり、母と口喧嘩した私は考えた。平和な家庭環境とは、家族が仲良く、互いを大切にし、愛して、穏やかな気持ちで生活している状態だろう。そして、平和とは良好な関係を維持することだそうだが、私たちが人間である以上、この関係を維持することは、私たちの考え方や感情が変化するため、そう単純で簡単なことではない。友人、家族、恋人、同僚、仕事関係など、多様な人間関係を広範囲に及んで私たちは持つことがある。まだこの世の関係の多くに触れたことの無い私が言うのも変だが、悪い関係であることに気づけず、その関係を失ってから気づくことだってある。

例えば、兄弟間の争いだ。歴史においても兄弟の争いは大きな影響を与えてきた。鎌倉時代初期、兄の源頼朝は弟の源義経を討つたことはご存じだろうか。頼朝は政治的な安定を重視し、義経は軍事的な才能を活かした行動を優先したため、互いの主張が対立し、兄弟喧嘩に発展した。私の家の中でも、私と双子の弟の兄弟喧嘩は小さな戦争のようなもので、いつも親が「うるさい！」と声を上げるまで喧嘩は終わらない。アイスクリームの味を選ぶことから朝ごはんのフルーツ、私と弟はいつも競っている。りんごは特に私たちの好物で、幼い時から私と弟はりんごを両手に取り、右手のりんごがなくなれば、左手のりんごを食べている間に右

手で皿のりんごを取るといふような感じであり、りんごを食べる。だから、これには祖母もびつくりで、毎年、家にお邪魔する時にりんごを出してくると、「こら、両手にりんごは持たないの」と言うのだが、私も弟も食べているのに夢中で手を止める暇も、答える暇などもない。一見、可愛いと思うかもしれないが、母にとつては迷惑で、時に弟が私に一切れだけ残して他は全て食べることもあつて、そんな時は、「ママ、食べられた」と喚く私のために、母はまたりんごを切らないといけない。

このように、争いは家の中でも、世界においても絶えることがない。平和を築くことができても、それを維持し続けるのも一苦労。更に、私と弟の争いを止めてくれる母のような存在が必ずいるとは限らない。では、平和はどのようにして保てるのだろうか。一番大事なのは信頼。私が遅れて起きた時にりんごが二つ残っているとすると、弟に「りんご何個あったん」と聞くのではなく、弟が誠実であることを信じて、その二つのりんごをいただく。このように、他人を信頼することで、その人の信頼を得ることが出来ると私は思う。近代化した今でも、戦争は遠くの土地で起っている。しかし、それも、アメリカから日本の距離に比べたら、随分近いところで。私たちは平和を守るよう教わってきたが、まだまだ戦争は続いている。

推し活

佐々木 南那

みなさんには推しはいますか？私はいます。

最近推し活というものは世間に浸透してきていて、推し活をしている人が多いと私は周りを見ていて思っています。それとともに問題になっているのが、推しのためにお金を使わなくてはならないと思ひ、グッズをたくさん買ったたり投げ銭をたくさんしたりすることです。推し活のために借金する人も増えているそうで、私はそんな世の中はおかしいのではないかと思ひました。

推しのためにお金を使うことを否定はしませんが、借金するほど、もしくは、金欠になるほど推しにお金を使い、生活を不便にするのはやりすぎではないかと思ひます。これは推しに限らずゲームへの課金なども含まれると思ひます。

ゲームや推し活などは、お金を払わなくても、完全ではないが、ほとんどすべてできます。ゲームは遊べるし、推しのこともX(Twitter)やYouTubeなどで見ることが出来ます。もちろんグッズを買って楽しむのもいいと思ひています。私もグッズは持っていますし、それをカバンに付けたり、友達とそれで写真を取ったりします。そういう文化があるのも私はいいいと思ひています。お金を推しにかけることによつて推しはお金に困らないかもしれません。ただ、自分もお金に困る状況なのに、お金を推しのためだと言つて破産することは違ひと思ひます。オタクにたくさんお金を使つて破産してほしい推される側の人はいいいと思ひます。破産することによつて結果的にいろんな人に迷惑がかかります。そして、自分の評価も悪くなります。盲目的なオタクは、害悪オタクとインターネット上では言われがちです。推しにも嫌われてしまふ可能性もあります。

そういう面から、私はほどよく推し活をすることは、自分にとつても推しにとつてもいいことだと、私は思ひました。盲目的になつてお金をたくさん使わず、破産しないように推し活をすることが、私は大切だと思ひます。楽しいと軽率に思えるぐらいの推し活がいいし、グッズの量や投げ銭をいくらするかではなく、どれだけ自分が推しのことを見て楽しんでるかが推し活ではないかと思ひました。

【創作文】ルロイ先生との思ひ出

大野 初実

私が天使園に入ったのは、数十年前のことだ。物心がつく前からそこに住んでいたのに、ルロイ先生と初めて会った日は何ひとつ覚えていない。けれど今思えば、私が天使園で過ごした十七年間は、本当にあ

つという間だった。まるで、数週間の出来事だったような、ときには数日間の夢のようにも思える。

そんな昔のことを、今、久しぶりに思い出していた。普段なら朝の支度に追われて、昔のことを振り返る余裕などないのだが、今日は少し違っていた。昨夜、天使園で一緒に育った友人からの手紙を読んだからだ。

彼は私と同じ年で、中学三年生の秋頃に天使園へやってきた。最初は少し壁を作っていたけれど、だんだんと心を開いてくれて、気づけば私の大切な友人の一人になっていた。彼がルロイ先生と握手するとき、天使の十戒の一つの、ルロイ先生とうっかり握手をすべからず、というふざけたルールを思い出して、毎回身構えていた姿が忘れられない。その様子が可笑しくて、私はよく後ろでくすくす笑っていた。それは十数年経った今でも、たまに昨日のこのように思い出し、大笑いすることが出来る。

手紙の中には、近況報告と共に、この前ルロイ先生に会ったよ、と書かれていた。私は数週間前にルロイ先生から手紙が送られてきていたが、あいにく出張の真つ最中で、私はもちろん会いたいと思っていたが、それは叶わなかった。だから、彼の話の少し羨ましく思いながら読んでいた。手紙には、先生と交わした最近の話も少しだけ書かれていた。その中に、オムレツを少ししか食べていなかった、という一言があり、それがなぜか私の胸に引っかかった。ルロイ先生は、私の知る限り大食らいで、どんな料理も残さず平らげていた。その彼が、食事を残すなんて、ちよつと信じられなかった。

数分後、私は出勤の支度をようやく終えて、机の引き出しから手帳を取り出した。古いページに、ルロイ先生の住所と電話番号がメモされている。インクが少しかすれていた。そういえば、私は先生からの手紙に返事は出来ず仕舞いだった。途中で忙しかったこともあり、私は返事を出すタイミングを逃してしまっていた。ルロイ先生からの手紙の封筒を見返して、少しだけ胸が痛んだ。だが今からもう仕事に行かなくてはいけない時間なので、返事を書くのはもう少し先になりそうだ。

玄関へ向かう途中、私はふと、ルロイ先生に言われた一言を思い出した。それは確か私が天使園を卒業する日のことだった気がする。桜が舞う中、私とルロイ先生は何かを話しており、ふとルロイ先生が黙って、何

かを考えているような仕草をした。私は不安になって話しかけようとしたが、ルロイ先生の横顔が神様みたいに見えて、無意識に背筋を伸ばしたのを覚えている。その後ルロイ先生は、ふいに私の手を取った。その手は乾いていたが、不思議と温かかった。そしてルロイ先生がこう言った。

「君の未来に、祝福がありますように。」

私はなにも言えなかった。今思えば何か返事をすればよかったと感じているが、その時は、ただ、その言葉が、深く、静かに心に残るだけだった。

靴を履きながら、私はふと、今度カナダにでも行ってみようかな、と思った。そう簡単なことではないことは知っているが、同級生の彼からの手紙で、ルロイ先生がカナダの本部修道院に行くつもりだということを知ったので、今は会えないがいつかは会いたいと思ったのだ。玄関の扉を開けると、春の風が頬を撫でた。どこか懐かしい匂いがした。

それからしばらく経ったある日、私はポストに届いた一通の封書を開いた。差出人はルロイ先生だった。その手紙には、静かな筆跡で、私の近況を心配するようなことが書かれていた。そして、最後には、この手紙が届く頃私はもうこの世にはいないのかも知れません。君の未来に、改めて祝福がありますように、と綴られていた。それを見た瞬間手が震えた。あの時無理にでも手紙を出しておけば、と考えてしまった。ルロイ先生は、仙台の修道院で静かにその生涯を終えたのだという。私は手紙を胸に抱きながら、そつと目を閉じた。もう握手を交わすことはできない。けれど、あの温かい手のぬくもりだけは、これから先ずつと忘れないだろう。